

## 歴史抜きに未来は語れない

S'ouvrir à l'avenir, en se fermant au passé ?

倉館 健一

KURADATE Kenichi

Université Keio

kr@keio.jp

### 1. はじめに

今回の「フランス語教育の現在とこれから」というテーマに触れて垣間みえるもの。耳障りが悪いだろうが、率直に言おう。それは「とりあえず現状を肯定すること」については合意していますよね、という身振りである。これが気になって仕方がない。

この業界周辺に限って、いま明るい未来など語る材料があるはずはない。矛盾や不条理、隠蔽や欺瞞に溢れている。未来が安売りされたところで、山積する問題を改善していくエネルギーは続くのだろうか。甚だ疑問である。これは「問題を提起していこう」とするのではなく、「世渡り上手になろう」とする処世術の身振りのように映る。果たしてこれは RPK の 30 年目の節目に相応しい動きか、見極める必要はないだろうか。

現状を漠然と追認し未来を語ることは、それがどんな意欲であれ、無節操にすべてを善しとすることにしかなるまい。決定論的思考が臭う。こうして誰もが保守化し、理不尽な現実と既得権益が益々固定化していく。これでは現在に未来に絶望しか生まない。

「忘れてええこと、忘れたらあかんこと、ほいから忘れなあかんこと」(河瀬直美)。もし今、我々の社会が大きな転機を迎えているのだとすれば、なにを軸としてこれら三つの整理箱にこれまで継承してきたもろもろを仕分けるか。それを念頭に社会を組み立て直してゆかざるを得ない。

人間性と教育はともに成熟を軸とした価値であり、その歴史性は、「近代」が持つ逆接性と再帰性のなかで捉え直していく必要がどうしてもある。「意図せざる結果」はなぜ生じ、どう自分自身に返ってくるのか。これはかつて教養主義に対して我々がそうしたように、蔓延した科学主義や資本主義に対し、その両義性を見極める営みでもある。

更に言うならば、言語科学や認知科学が戦前戦後の教養主義をリセットしたという考え方は、これまでの戦後史観が顧みられぬことと関連している。こうした単眼的思考が世界史への経路を遮断し、外交を困難にしている。戦争のリアリティから外れたところで軍事力を過剰に信用する姿は、過剰に英語力を信用する状況と相似する。9条を中心とする平和主義も決して外交向けのものではなく、国内消費用の性格がある。それは日本の言語教育に色濃い国内消費向けの性格とも通底している。こうした陥穽を相対化できない今の我々が、近隣諸国とも、またその他の国や地域ともうまくコミュニケーションが取れないとしても、なんら不思議はないので

はないか。「この国の死に方」(片山杜秀)を乗り越える、大学人としての見識が、今、問われているように思われる。

### 2. 東日本大震災以降

震災の後、大学生を相手にフランス語を教える立場で、一体なにができるのだろうかと考えあぐね、試行錯誤を繰り返す日々が続いている。「ここにはまずい」— 職場や業界でそもそもおかしい、さすがにまずいだろうと常々身近に感じていたこと。それらがつながり、はっきりと人類史に刻まれる大惨事になってしまった。こうした結果に至った原因の一端どころか、核心のすぐ傍らにある自分がある。「こうしてはいられない」— わだかまりを胸にクルマの流れに乗ることに甘んじていた自分は、諦め、自分の足で歩まねばいられなくなった。

9.11と3.11のちがひ。前者を通じて「戦争は必ずしも国家間の通告によるものとは限らず、いつでもどこでも起こりうる」ということがはっきりした。後者では「社会崩壊の契機は外側からくるだけではなく、内側に内包されている」ということ、つまり「被害者が同時に加害者でもある」ということが明白になった。「私たち自身の欲望と怠惰が私たち自身を撃つ結果をもたらした」(高橋睦郎)。一個人、大学教師、フランス語教師としての「加害」とはなにか。このまがまがしいものをきちんと表しておきたい思いに駆られる。と同時に、内面に潜んでいた孤独感が否応無しに深まるのを感じる。果たしてどう自分のことばと行動で表現できるのか。これが現在、自分にとっての最大の関心事である。

### 3. 「日本死ね！」

ではこうした思いを抱えている者は僅かなのか。いや、そんなことはない。立場は違えども、誰しもが何かしらの思いをもって体験した大惨事であった。またこの事実からは誰しも逃げることはできない。そして熊本の震災。太平洋に面したこの火山列島では大災害は避けがたく、今後も続くだろう。またヨーロッパで続く無差別テロも、当分避けられそうにはない。沖縄問題も差別・格差問題も同根だ。そこでどう立ち回るか。すべてはここにかかっている。

「あなたがいうこと、なすことはすべて、いずれ自分に帰ってくる」(J. ガルトゥング)。そしてまた、社会に生じた大きな渦の中で、「わたし」が自己責任として引き受け、無言のうちに我慢すれば、「わたしも自力で切り抜けたのだから、あなたもそうすべきだ」というメッセージを伝えることにしかならない。

なにごとにも経済的功利性だけを基準に計画され、その「勝者」と「敗者」とを分かち、この激化する市場。ここに放たれた個人は結局のところ、なし崩しに格差社会を是認することとなり、理不尽な現実と既得権益の固定化を補強する。

「保育園落ちた日本死ね！」このような当事者による強いメッセージをもった行動がなければ、そしてそれにつながらなければ、果たしてどうなっていたであろうか。

この文脈で「日本におけるフランス語教育の <現在>を踏襲・敷衍し、<これから>を模索・展望する」とした RPK のテーマに触れるならば、この固定化に与する展望のなかで、それぞれが「ぬげがけ」に与かろうとする場のように映らないだろうか。教育方法の実践例や論証であれ、その教育内容、そして当人の教育への「問いかけ」が語られないとすれば、「教育研究会」の趣旨から離れるだけでなく、そもそも教育実践として意味があるのだろうか。

たとえば非正規雇用の理不尽はすでに社会問題化している事実である。自分を追いつめるのではなく、また付度を期待するのでもなく、はっきりと怒りを表わしていいはずだ。まずは「わたし」がこの現実怒り、告発することが扉を開くことにつながるのではないか。その怒りに

よって連帯が生まれるならば、「一人で落ち込まなくてもいい、同じ境遇の人とともに主張していい」と思える「空気」が練られていく。そのような場として機能する RPK であってほしいという願いを自分は強くもっている。この思いは初めて参加して以来、感謝をもって抱き続けてきたもの。とりわけ今回は自分なりの恩返しとして貢献できればと思っている。

生業が利潤追求へと内部から変質してしまう危険性に誰しもが晒されるこの時代。この利潤動機に直面してどのように連帯・協力・持続可能性を維持できるかを考える場が是非とも必要である。グローバル資本主義の底辺で、どう社会防衛を図るのが問われている。

思い起こされるのは、これまで RPK にお連れしたフランス語以外の教員の方々の反応である。世辞もあろうが一樣に「こういう会はない。すばらしい」と言う。なぜか粘り強い「運動」が、あたかも別世界であるかのように、フランス語教育で展開してきたのか。RPK の未来もまたここにあるというのが持論である。明るい未来を語るだけでは、足りない。ラジカルな悪とは、極悪人の所業ではない。個々人の「陳腐な悪」(H. アーレント)と重大な結果の間にある。

#### 4. 不安と絶望と希望と

3.11 が文明観や教育観を更新すべききっかけになればいいと願う。不安や絶望はどこから生じるのかと考えると、それは決して未来が予測不能だからではない。むしろ未来は具体的にイメージされてしまっている。その未来を避けるために何をすればいいのかが見えない。これが問題なのであろう。個々人はなにをすればいいのか。あなた自身は？ RPK が「<これから>を模索・展望」しようというのであれば、そんなことを考える場となることを是非提案したい。

RPK はそもそもフランス語教育研究会。「フランス語」を通じた「教育」を「研究」する会である。とはいえここでも教授法信仰があり、理想の教授法を誰かが発見できる/してくれるものだと信じられている節がある。これが永久迷走回路への依存症でしかないことに、そろそろ気づくべきではないのか。核開発や遺伝子工学、AI 開発と同様、どこか人間の無限の進歩を前提とした教育観がそこにはある。スーパーやコンビニで売っている商品とどこが違うのか。もちろん個々にもろもろの調整を施されたものであり、結構だ。だがその開発も誰かに任せて終わり。そして集団と、自身を含めた個々人のドグマを見極めることへの無関心が瀰漫する。

一つのことだけを信じるのが危険なことは、言うまでもない。にもかかわらず、そのような機能してしまう現実がある。批判的教育学や教育哲学を顧みない教育方法論、またそのような教授法の応用や教育実践では、集団の規律を強化し、多様性を抑圧するものとして機能してしまうのだ。これでは教育現場を工場化、チェーンストア化するだけである。ならば教授法はすべからず学び棄てるべし、というコンセンサスが大切であろう。

信じることができなくなれば、立ち位置がわからなくなり、不安になるのは自然なこと。そして、そんな暗闇を照らす光となるのが本来の教師に求められる資質や能力であろう。教育研究の対象は、また « Rencontres » の名の本位はここにある。その光は自身から発する輝きでなければ照らし出せない。色の違い、強弱はあれかし。陰もまたさまざま。されどかりそめの光ではそもそもこの関係が成り立たない。そしてその光は固定されてはならないのであり、みなで話し合いながら、さまざまな光源となっていくことが大切である。

この国の教育、特に言語教育はなぜかように貧弱化するのか。この光をカギとすることで、ことばの教育のもつれも浮き彫りになってくる。そして「同一労働・同一賃金」の不履行や、「非正規切り捨て」の容認が、単に個々の専任教員たちが強欲で無責任で、非人間で、無能だからといった構図に単純化できる問題でないのだとすれば、振り返って、あなたならどのよう

な立場や行動をとるのが問われることとなる。歩みは遅くとも、このもつれを解きほぐす営みに粘り強く取り組んでいくことに自分は希望を見いだしている。

解きほぐしは決して容易ではない。しかし、この問題を越えていく先にしか、未来がないのだとすれば、希望を見いだせるはずだ。つながりがひろがり、様々な異なる観点と、より多くの手がかりを得ることでようやくそれが可能となる。それに逆行するような安易な手段に訴えてほしくはない。老子曰く、「学を断てば憂いなし」。確かにそうかもしれない。だが、絶望から夢を掲げ、実現しようとする試みにこそ、希望がある。「思いは招く」(植松努)。そう信じたい。であるならば、過去と現在を必要に応じてまなびなおすこと。これこそが、手堅い未来計画なのではないだろうか。

### 5. 歴史抜きに未来は語れない

主権国家の秩序に学生を従わせるという教育手法。一進一退はあれ、このままでは時代の変化に対応できないとの認識は広まってきている。とはいえ国家とはそもそもナショナリズムを強化する回路であるから、常に監視を怠ってはならない。

これに加えて、人間の無限の進歩を前提とする教育からの転換が必要だ。国家秩序や無限進歩は、国家資本主義と競争の原理に則っており、その計画性は本来の独立自尊の教育とは相容れない。「カネ」が自立の手段になれば、経済の安定が求められ、つまるところ個人が国家や組織への依存を強める結果へとつながってしまう。

そして FLE ではこれまでこの種の批判が忌避されてきたのは決して故なきことではなかった。フランス語はこれまで高級文化の中心的な対象の一つとして遇され、国家に対しても、また個人に対してもプラスな面が強調されてきたのだ。しかし、もはやその文化価値は根底から揺るがされており、環境はすっかり様変わりしてきている。

とはいえ、すべてが無に帰すものでもなく、また歴史的文脈においてはしっかりとした価値が認識されることも事実。「魯迅は自分を新しいものと考えたことはなかった。いつも古いものとしてとらえた。そしてその自分の古さを徹底的に憎むことによって、中国の社会の古いものと闘った」(竹内好『中国における近代意識の形成』)。フランス語教師の多くはこのような思いを共有してきたのではなかったか。ここ東アジアにおける近代の超克とは、社会とことばとアイデンティティのどれも欠くことができないものであり、そしてそれは未だ乗り越えられたものとはなっておらず、それどころか全く手つかずのままこの戦後70年の状況があるのは、周知の通りだ。

その際、とりわけわれわれフランス語教師が取り組まなければならないもの。それは高級文化を媒介する門番なり神官として生きられてきた負の遺産であろう。ここには大きく分けて、「権威主義」と「管理主義」、そして「技術実体主義」の問題がある。未だにこれらへの依存は色濃いと言わざるを得ない。言うまでもなく、原発の問題はこれらがはっきりと構造化されたものである。そしてこれが現在の社会問題の多くにつながっている。フランスが世界でも突出した原発大国であることも無縁ではない。

逆にいうならば、すべての社会問題の核心は、我々が取り組まなければならないこの欺瞞にあるということだ。そして今なお残る、こうした権威や管理や技術への依存がどこからくるのかと問われるならば、それは多様な考えや立場を包摂していくあり方、またそのための活動などに向き合っていない現実、そこから生じた不安、自信のなさのあらわれだといえるのではないか。

なぜフランス語を学び、教えてきたのか。そしていま、なぜフランス語を教えるのか。果た

して一様なのか。多様なのか。どこまで一様なものがあり、どこからがどの次元で異なるのか。言語教育の世界では長らくそんなことが問われることなく、とりわけフランス語を学び教えることは、この社会でも自明なこととされてきた。「この[問いかけの]不在こそが技術実体主義を産み、コミュニケーション能力一辺倒を産み、さらには方法にしか関心を持たない「考えない教師」を量産した」(細川英雄『「ことばの市民」になる一言語文化教育学思想と実践』)。この批判の射程は英語教師や日本語教師に留まらない。このような問題意識を背景にした教育実践とその研究には、いま我々が全力を挙げて取り組むべき地平が広がっている。

### 6. 仏語教師魂～忘れてええこと、忘れたらあかんこと、ほいから忘れなあかんこと

近代国家建設を第一義として邁進してきたこの国の国民が先の大戦での軍部台頭に際して示したような同調圧力と動員主義は、そのまま戦後の経済成長に温存され隠蔽されてきた。こうした貧困から物質的豊かさへと至った経済成長の記憶への順応機制により、大量消費文化に麻痺し内省もままならぬまま、今なお団塊となって崖っぷちに向かって邁進しているように映る。一途なその叫びは静止した幸福の幻像への執着と貧困と絶望のトラウマから発されており、懐旧をまとった全能感と刹那的な悲壮感にうち満ちている。醒めた目からは痛々しい発展途上国態勢の断末魔に映るだけで到底与みしがたい。これは、かつて国民国家の形成発展に最適化された「英独仏トロイカシステム」(鈴木孝夫)がこの国民を飼いならしてきた結果なのであり、いまなお幅を利かす「正しい」外国語教育を追求する者たちの恫喝的態度は、敗戦の怨念の化身となった妖怪たちの仕業である。「正しい」外国語教育の追求、そして権威化を競う言説は、一体なにに資するものであり、なぜ人はこれに追従するばかりなのか。

一方で日本やフランスばかりでなく、国民国家主義は至るところで支配的である。とりわけ昨今のこの種の圧力の高まりは不気味で、看過できるものではない。とはいえこれは一部の狡猾な野心家の企みに矮小化できるような種の現象ではない。我々のごくごく身近な現場にこそ、その紛うことなき根源があることを直視すべきだ。

その一方で、民主化は社会を、人間を急速に変化させている。国民国家主義の延長線上での展望だけでは教育は行き詰まることが認識されている。このような伝統と変化のギャップが表面化しやすい学校教育の局面では、妖怪のような「毒教師」が産まれるとしても何ら不思議はない。教育に「正しさ」を求めることはできない。しかし毒となる「悪い」教育ははっきりと示すことができる。

「私は、年中幽霊と会っているような気持ちです」という加藤周一の述懐は、他人事ではない。彼は「死者は考えを変えない」という。「しかしそれだけではない」。「移ろい変わりゆく世界を捉えるためには、変わらぬ視座からそれを見る必要がある」ともいう。

さて、我々フランス語教育にいま関わるものたちにとって、「忘れてええこと、忘れたらあかんこと、ほいから忘れなあかんこと」とはなんであるか。

萎縮せず、理不尽に対してはきちんとモノを言い、そして行動する。そんな仏語教師魂というものがあつたのだとすれば、それをフランスや日本などという国民国家に回収され、根絶やしにされてはかなわない。これは関係性の中で生じた市民の遺産である。この国家に回収されない教師魂の継承・発展について責任を痛感し、自責と自戒の念に駆られる。過剰に組織の論理に流れ、全体の空気を読んで、個を殺していくのは、教師本来の姿ではない。そのためにも歴史を学び、現在の把握に努め、やり直さなければいけない。教師ひとりのロマンではすまされない事態であれば、学校や専門分野、対象言語の垣根を越えてつながっていくこともできる。

30年の節目を迎えた RPK がそのような場として今後も育まれていくことを心から願う。